

## 「役者と役柄」の比喩から「真我と自我」の関係を探ってみる

以前に何度か触れたことですが、「真我と自我」の関係を、「役者と役柄」の比喩を通して考えてみたいと思います。その前に確認しておきますが、真我は実在する(つまり、生じたり滅したりはしない)本当の自分であり、自我は一般に私たちが自分だと思っている仮象の自分のことです。前者が不生不滅の実在であるのに対して、後者は生滅する現象です。このように明確に異なるにも関わらず、実在する真我と現象する自我は、混同されるか、あるいはそもそも一つだと誤解されているのです。その混同や誤解をいかにして解くかを考える際に、「役者と役柄」の比喩は、とても役立つのではないかと考えています。

まず、「役者と役柄」の関係から考えてみます。役者は、或る特定のドラマ(時代や場所や登場人物が設定された)において、或る特定の役柄を演じます。役者は稽古の段階から役柄になり切ろうと、いろいろと創意工夫を凝らして役柄に入って行くことでしょう。ドラマのストーリーは、そのドラマに出演している全ての役者には、ほぼ分かっており、いつ・どこで・誰が・誰に・どうするか、というドラマの展開は、既に了解済みです。そのことが分かった上で、それぞれの役者がそれぞれの役柄を演じるわけです。たとえば、大河ドラマ「麒麟がくる」では、長谷川博己が明智光秀を演じています。ところで、役者が役柄と同一人物でないことは、役者自身にも、ドラマの視聴者にも分かっていることですが、それはドラマの外部にいるからこそ、分かる事柄です。しかし、ドラマの内部にいる登場人物にとっては、ただ目の前に人物が存在するだけで、その役柄を演じている役者が存在するわけではありません。眼前にいるのは、明智光秀であって、長谷川博己ではありません。そもそも、長谷川博己なる人物を知りませんし、時代や場所や登場人物がドラマとは全く異なるのですから、その実存的状況下にいる限り、知る由もありません。このように、ドラマを観る立ち位置が、ドラマの外にあるのか、それとも内にあるのかによって、人間(役者・役柄)の捉え方が全く違って来るわけです。

ドラマを観ることを、役者と観客(視聴者)の双方から考えてみましょう。役者としては、可能な限り役柄と一つになるよう稽古を重ねて舞台上に上がりますが、役者が役柄を演じているうちに、おそらく両者が一体化して、役者が役柄になり切ると共に、役柄が役者に乗り移って一種の冥合状態(憑依とも言える)が生まれるはずですが、もともと、その状態は持続と中断を繰り返すことでしょう。つまり、役者は役柄と一体でありながら、その一体から離脱した状態も同時に何度も何度も経験すると思われる。この場合、役者は、演じる役柄であると同時に、それを演じる役者でもあるわけです。役柄と役者が渾然一体となっています。役者が役柄から完全に離れれば、それはもうドラマの役柄ではありえません。劇中で、明智光秀が、「実は、私は長谷川博己だ」と語るようなもので、ドラマにはなりません。それゆえ、役者の眼は、ドラマの役柄に入り込んで、ストーリーの展開通りに動く限りは、役柄の眼に終始しますが、それを演じる役者の視点に立つと、超越的な眼で役柄やドラマのストーリーを観るということになります。いわば、役柄の眼と役者の眼という二重の眼を以て、ドラマの中で

演じながら、同時にそのドラマを観ているわけです。(脚本家や監督や演出家の眼は、いわば高次の存在者の眼であって、ドラマ自体のストーリーを考案し、その展開を調整・制御・脚色・演出します。)

これに対して、一般の観客の場合は、ドラマに引き込まれて役者が演じる役柄に(あるいは、役柄を演じる役者に)共鳴することはありますが、基本的にはドラマの外部からそれを観て、その展開に一喜一憂することになります。観客の眼は、どこまでもドラマの外部にあります。言い換えれば、ドラマの外から、役者の演技の巧拙を判断するわけです。あの役者はこの役柄が上手いとか、この役者はあの役柄が下手だとか語るのです。ドラマのストーリーの起伏や展開の妙味をも同時に鑑賞しながら、また何らかの感情の浄化を経験しながら、観客は役者も役柄も観ているのです。それは、いわば<sup>まろどがみ</sup>客神としての神仏の眼で客観的に、またしばしば主観的に観るわけで、観客の眼は、個人差はありますが、よほど時代や社会の制約を被らない限りは、概して公正であると言えます。

以上のように、役者が演じる役柄を観客は観るのですが、もう一つ重要なことを指摘しておきたいと思います。それは、ドラマの中で役柄が死ぬことはあっても(ちょうど、明智光秀が本能寺の変の11日後に死ぬように。因みに、坂本城へ向かって敗走する最中に、光秀が百姓の槍で刺し殺された小栗栖の竹藪は、明智藪と呼ばれていますが、我が家から2キロと離れていません)、役者自身は死なないということです。もちろん、現実の役者はいずれ死ぬのですが、それはこの比喻から離れば、実は役者自身が、現実の人生劇では一つの役柄であるからに他なりません。比喻上の役者が死なないのに対して、役柄はいずれ死を迎えるのが宿命です。不死なる役者に対して、死が不可避な役柄。こうした「役者と役柄」の鋭い対照が、「真我と自我」の関係を捉える際に、効力を発揮すると思われるのです。

以上述べたことを、「真我と自我」の関係に当てはめてみましょう。真我は実在する真の自分、自我は生滅する仮象の自分でした。仮象とは、仮にそのように現れているだけで、本当は実在せず、生じては滅することを繰り返します。さて、自我は、自分のドラマ(人生劇)において自分が主人公の或る役柄を演じています。そのドラマのストーリーは、特定の時代の特定の場所で特定の登場人物と共に展開されて行きます。そこで試行錯誤を繰り返しながら、様々な出会いの中で様々なことを学んで成長して行きます。現在、地球上の77億の人たちは、その77億通りのドラマを自分を主人公にして演じているわけです。

そのように、自我同士は、互いに自分のドラマの主人公同士として、出会いを通して協調や対立の関係を結ぶのですが、その自我の眼の奥には、自我の有り様を眺めている別の眼、即ち省みる(顧みる)真我(=直霊)の眼が控えています。というよりも、自我の眼に真我の眼は重なっています。まるで役者の眼と役柄の目が一体である様を彷彿とさせるかのように。では、自我の眼と真我の眼が全く同一かと言えば、それは違うわけで、自我の眼はどこまでも人生劇の内部しか見えない眼であるのに対して、真我の眼は、その人生劇の外部からそれを観ている眼ですので、両者は明らかに次元を異にしています。にもかかわらず、両者は一体化しているのです。古典的な言い方をす

れば、自我と真我は、不一不二の関係にあります。全く同じではないが、しかし全く異なるわけでもない。そのような関係を切り結びながら(敢えて、「切り」を付けて、両者の断絶を示唆しています)、役者としての真我は、役柄としての自我を演じていると言えるのではないか、と思っています。

この比喻で大事な点の一つは、自我(役柄)がいずれ死ぬのに対して、真我(役者)は死なないことが理解可能なことです。『人は死なない』(矢作直樹)という本が、かつてベスト・セラーになったことがあります。もちろん、肉体はいずれ機能停止するので、人は死ぬのですが、それでも肉体よりも微細な身体を纏った存在状態で生きています。こうした「死なないこと(不死なること)」が理解し難いのは、ただ私たちの現実感覚が物質世界に余りに密着しているからに他なりません。ほとんど認識上の視野狭窄と言えるほどに、現実感覚が余りにも狭い範囲に限られているためです。

それゆえ、新たな人間観の構築においては、「人は死なない」霊性と「人は死ぬ」実存、この二つは、一見すると、互いに矛盾し合うものですが、その両者を強靱に一つに統合しうる眼を養成することが、必要不可欠となるのです。人間の存在構造自体が、不死と可死の両面に跨がっているのです。その全人的な眼は、直観と論理(分析)を統合する眼でもあり、また真我と自我を不一不二的に捉える眼でもあるでしょう。こうした真我と自我の重なりを、現在の私たちのように即自的に生きるのではなく、役者が役柄に入り込み、役柄が役者に乗り移った冥合状態から一步離れて、役柄とは役者が演じるものであることに気づき、役者の観点から役柄に向き合うこと(長谷川博己が明智光秀を演じる際に、光秀と一体となりつつ、しかも光秀に没入することなく、光秀を客観視すること)、これが求められるのではないのでしょうか。そのとき、自分は役者なのか、それとも役柄なのか、いずれでしょうか。答えは、その両方とも自分なのですが、より正確に表現すれば、実在する役者が仮象の役柄を演じているのであり、役者の方が存在論的には役柄に先行しています。演じられている役柄は一時の仮象ですので、永遠に実在するものではありません。本当に存在するのは、ただ役者だけです。役者が色々な役柄を演じ分けているのです。それゆえ、この人生は、そのような意味でも正にドラマに違いなく、私たちは特定の名前が与えられて、特定の時代や場所で特定の登場人物と共に、特定の役柄を演じているのです。役柄や人格を意味する **person, personality** が、劇中で付ける仮面 **persona** に由来することは、極めて象徴的です。これでもまだ、この自分(自我)がドラマの役柄であることが認め難いのでしょうか。

(以下の拙論の最後もご参照ください。説明の仕方が異なる箇所もあります。)

「祈りの光学と変容する自己理解」、『トランスパーソナル心理学／精神医学』第9巻第1号(日本トランスパーソナル心理学／精神医学会), 9-16頁, 2009年.

DOI<https://doi.org/10.32218/transpersonal.9.1.9>

(2020/06/24 棚次正和)